

春の海終日のたりのたりかな 蕪村

私たちは「終日」を、ヒネモスと読むもの
と思っていますが、少し歴史を振り返ると、
いろいろな形があったことが分かります。た
とえば、『日本国語大辞典』（小学館）では、ヒ
ネモス以外に五語を載せています。

ひめもす 色葉・名義・伊京・饅頭・黒本
ひめむす 名義・文明
ひねむす 文明・明応・天正
ひねもそ 書言
ひめもそ 書言

各語の下に、それぞれの〔古辞書〕欄の書
名を記しました。それぞれの時代の辞書にも
あるほど定着した語だったことになります。
単なる言い誤りではないわけです。

このように種々の語形が生まれたのは、語
源が分からなくなったからと考えられます。
必ずしも学術的な語源ではなく、「なぜ、ヒネ
モスと言わねばならないのか」という素朴な
疑問を解消できるものであればいい。納得で
きればその言葉が使えるような《きっかけ》
であり、その意味では、実生活のなかで言語
を使う人のための語源です。逆に、そういう

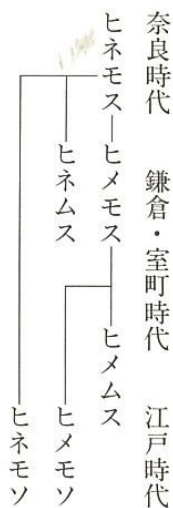
語源がなくなれば、ヒネモスでなくてもよく
なる。そこで種々の語形が現れた。多少変化
しても他の語と同音にならなかったので定着
もした、ということなのでしょう。
一方で、語源の制約がなくなったとはいえ、
まったくかけ離れた言い方にならないのも興
味深いところです。

の	こ
ま	と
ど	ば

ヒネモスの背後

佐藤貴裕

(岐阜大学助教授)



各語は、およそ右のように変化したよう
ですが、それぞれの前身の語から、音の
変化によって生じました。ヒネ・モスがヒメ・モスにな

るのは、モのmの影響で直前のネがメになっ
たのでしょう。他の四語も同種の影響により
生まれたようです。

こうした変化は、現代の目から見れば試行
錯誤と言ってしまえますが、当時の人々、す
なわち当事者には、そんな取り澄ました表現
は無縁のものだったはずです。私の思い入れ
も込めますが、語源の支えを失った言葉を
扱いあぐねながらも使おうとした結果ではな
かったか。その意味では、言語使用者として
ヒネモスに真摯に対応した痕跡としてこれら
の五語を見たいのです。人間の営為として素
直に認めたいということでもあります。

文化の理解は、『花』だけではなく、背景や
土壌まで見て、はじめて可能になる、という
考えによく接します。このことを言葉の世界
にもあてはめれば、たとえば、ヒネモスの五
つの転訛形を——より言えば、それらを生み
出した人々の心理を——正しく見つめる態度
が必要だ、ということになります。それがな
ければ、営為の集積であるはずの言語文化を
理解することは難しいように思うのです。

*ヒネモスの語史については、前田富祺氏『国語語彙
史研究』（明治書院 一九八五）に依りました。